

## 活動完了報告

### 「イタリアでの演奏活動、声楽レッスン、コレペティレッスンの受講」

土師 伊久美

#### 《報告および成果》

2023年11月19日からイタリアへ渡航し、コンサートを開催することが出来た。

今回のような助成金制度を受け、自ら企画し実施するという事は初めての経験で、とても有意義な時間となった。

中でも「コンサートを企画する」ということから大きな学びがあり、いつも演奏家として舞台に立たせていただいている背景には、多くの準備や苦労があることを実感し、そして、そこで協力してくれる仲間に出会うことの大切さ、共に乗り越えたからこそ得られる喜びを、心から感じる事ができた。

特に、今回はイタリアのトッレ・デル・グレーコという小さな町での開催で、会場を探すところから苦戦したが、現地に住む友人らがいくつか会場を見に行き、設備や料金などを交渉してくれたおかげでコストを削減することができた。また、プログラム構成や演奏形態を自由に決められるからこそ、お客様のことを常に意識しながら曲目や進行を考えることができた。

当初、「イタリアでの演奏活動」の他に「声楽レッスン・コレペティレッスンの受講」を予定していたが、滞在先からレッスン先のポローニャまで移動距離があり、スケジュールを合わせる事が難しかったこと、新型コロナウイルス陰性証明が必要であったことの事前確認不足と、今回の予算から交通費や検査費を出すことができなかったことが理由で、レッスンの受講ができず、企画内容を変更した。「子どもと音楽の関わり」について焦点を当て、自身の演奏面のスキルアップではなく、音楽家としてのスキルや知識を深める時間にした。

現地で共に行動をしていた Teresa と一緒に保育園や学童施設を訪問し、彼女の音楽療法士としての姿を見学した。音楽療法の先進国としてアメリカやドイツが挙げられるが、近年、イタリアの各教育現場でも積極的に取り組まれており、インクルーシブ教育を取り入れている園が多い印象を受けた。

保育士の目では判断が難しい原因や対策を、彼女が音楽療法士の観点から指摘しており、1クラス10人程で、基本的にはリトミックを取り入れた集団音楽療法を行っていたが、その中で自閉や多動傾向のある子どもに対して、楽しい音楽を聴いて感情表出を促す・静かな音楽を聴いて緊張をほぐすなどの受動的な音楽療法を行ったり、マラカスや鈴をもって自由に演奏させ能動的な音楽療法を行うなど、臨機応変にアプローチを変え、発達に障がいが見られる子どもやそれぞれの性格など、音楽療法から得た子どもたちの情報を保育士と共有していた。

また、友人が通うイタリア最古の音楽院、ナポリ音楽院(サン・ピエトロ・ア・マイエツラ音楽院)に許

可を得て入構し、実際に音楽史の授業を受講した。教授のご厚意で図書館にも入ることができ、ナポリ音楽院出身のドニゼッティやベッリーニ、レオンカヴァッロ等が遺したスコアや当時使用されていた楽器、外部に持ち出せない貴重な資料を見ることができた。そして、少しの時間ではあったが、オペラのディクションや、楽曲の解釈をナポリ音楽院の学生から教わることができた。

今回、”世界の共通言語である音楽で、世界中の人たちと会話をするべき”という想いを第一に本企画を遂行していたが、それを感じられる瞬間が多々あり、様々な場面で実現できる可能性があることを確信した。滞在した地域は、イタリア北部と比べて移民や共働き家庭が多く、学童施設にいる子どもたちは様々な人種であったり、イタリア語を話すことがまだ難しい子どももいたが、リズムゲームをしたり歌を歌うことで周囲と打ち解け、コミュニケーションをはかるようになっていた。

私自身も、子どもたちは日本人の私を見てどんな反応をするか当初は不安だったが、笑顔で温かく迎え入れてくれ、寧ろ人種など気にしていない様子だった。日本の手遊び歌や言葉に関心を持ち、純粋に楽しんでくれた子どもたちの心の動きや目の輝きを、いつまでも忘れないでほしいと願うと同時に、私たち大人が壊さないよう、一人でも多くの子どもたちが音楽に触れられる居場所づくりをこれからもより意識的に構築していくべきだと強く感じた。

#### 《今後の課題》

日本の手遊び歌が思いのほか反響がよく、大人からも「我が子や親戚に教えたい」と好評で、プログラムを増やしておくべきであった。

画用紙に手遊びのイラスト写真を貼り、それを見ながら音楽に合わせて実践するという内容で、1歳くらいから認識し身振り手振り実践していたので、幅広い年齢層にそれぞれ違ったアプローチで手遊び歌やリトミックの大切さを発信できると感じた。

また、現地で実際に行っていたリトミックで、スライドホイッスルの音高を使って体を動かしたり、大きなロープを輪になって持ち、曲の強弱や速度に合わせて輪の大きさを変えたり引っ張ったりするメニューは興味深く、日本の教育現場や子ども向けの演奏会等で取り入れることができると感じたので、イタリアやその他教育先進国で行われている音楽教育をより探究し、子どもたちが音楽っていいなと思えるような機会を増やしていきたい。

